

未来の
収穫祭
2023

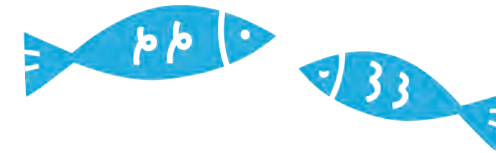
未来の
収穫祭
2023

目次



- はじめに…… P 1
- 会長あいさつ……P2
- 滞在先の島々……P3~P6
- プロジェクトの様子……P8~P17
- 作品紹介…… P18
 - ・本島……P19~P25
 - ・広島……P26~P30
 - ・小手島……P31~P38
- HOT サンドルフプロジェクトによせて……P39~P41

はじめに



HOTサンダルプロジェクトは、香川県丸亀市内の離島に、美術を専攻する学生が滞在し、制作活動に取り組む事業です。アートによる島の活性化、若手芸術家の制作活動支援および丸亀市の文化芸術振興の推進を目的として、2012年から実施しており、11回目を迎えた2023年は、本島、広島、小手島へ計10名の学生が滞在しました。

瀬戸内海に浮かぶ島々の美しく雄大な自然の中に身を置き、作品を制作したことは、学生たちにとって貴重な経験であり、大切な思い出になったと思います。

また、ワークショップなどの行事を通して、島の方々と学生たちとの交流が深まり、島内に活気が生まれ、実りあるプロジェクトとなりました。

島での滞在の様子、学生が制作した作品をご紹介します。

丸亀市・HOT サンドルフプロジェクト実行委員会

会長あいさつ



HOT サンダルプロジェクトは今夏で 11 回目となり 10 名の学生が各島で滞在制作をし、展覧会「未来の収穫祭 2023」を開催しました。コロナウイルスのまん延が落ち着いたとはいえ、まだまだ油断ができない状況の中、快く学生達を受け入れてくださった島の方々へ感謝を申し上げます。出来上がった学生の皆さんの作品は、今年ものびのびと描かれた素晴らしい作品ばかりで滞在先の島での生活の豊かさを感じることができました。普段の生活ではなかなか感じることでできない自然や時の流れを身体いっぱいを感じ体験することは、学生の皆さんにとってかけがえない宝物や時間になったことと思います。

今年は数年振りに島の方々とワークショップを行いました。本島では香川大学の学生を講師にお招きして「讃岐三白」の一つの和三盆を使った和菓子作りを体験し、広島では HOT サンダルプロジェクト卒島生で、現在は島に移住している 3 人を講師にお招きして広島の青木石と島の方々が海岸で集めて下さったシーグラスで光のオブジェを作りました。どちらも島の方々と学生さんの笑顔あふれるにぎやかなワークショップとなり、島の方々と交流が深まりました。そしてお世話になった島の方々の前で作品発表会を行い、昨年へ引き続き移住している卒島生に講評をお願いしました。学生さん達は先輩の話から学ぶことがたくさんあったと思います。講評をした卒島生も過去に HOT サンダルプロジェクトに参加した頃を思い出してパワーをもらったことでしょう。今後の島生活が充実し、制作活動がスムーズに進んでいくことを願っています。

また、今年度からの図録は新たな試みとしてより多くの方にプロジェクトを知って頂きたく、滞在先の島の紹介や約 1 ヶ月のプロジェクトの様子を写真で紹介しています。作品とともにご覧頂けると嬉しいです。

最後に、今年度の開催にあたりご協力を頂きました島の方々並びに関係各位へ心からお礼を申し上げますとともに、来年も開催できることを心より楽しみにしています。

HOT サンダルプロジェクト実行委員会会長 正木 かつみ

滞在先の島々

本島 Honjima

昭和9年、国立公園として第1次指定を受けた瀬戸内海国立公園の中にあつて、備讃海域に点在する塩飽諸島の中心島。豊臣秀吉以来、自治権を安堵（あんど）されていた人名（にんみょう）制度の中心島で、人名から選出された4人の年寄によって政治が行われ、江戸時代は天領として明治維新まで人名の自治が続きました。幕末に太平洋を渡った咸臨丸の乗組員として活躍したのも塩飽の人たちです。

島内は、信長や秀吉、家康からの朱印状や古文書も蔵するかつての塩飽水軍の政所で、国の史跡である「塩飽勤番所跡」など歴史・文化財の宝庫。

昔のままの集落が残る笠島地区は、重要伝統的建築物群保存地区に選定されています。

2013年からは、瀬戸内を舞台とした現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭」の会場の一つとなり、歴史と文化の融合するアートの島としても知られています。



▲笠島まち並保存地区



▲塩飽勤番所跡

広島 Hiroshima

丸亀港の北12.5kmの海上にあり、その名のとおり塩飽諸島の中で最大の面積の島です。戦国時代末期、長宗我部（ちょうそかべ）氏に敗れた落人が住みついたのが始まりとされ、本島と同じく人名の島でもありました。

丸亀港からの定期船が着く江の浦は、白い砂浜が美しく広がっています。島の南部には塩飽諸島の最高峰である王頭山（312m）がそびえ、山頂からは瀬戸内海が一望できます。

また、広島は良質の石材産地として知られ、中でも「青木石」（花崗岩）は有名です。島のいたるところで採石場跡を見受けることができ、現在も稼働する採石場からは石を割る響きが島の風物詩の一つとなっています。2019年にせとうち備讃諸島をテーマとする「石の島のストーリー」が本島とともに日本遺産に認定されました。



▲迫力ある採石場



▲尾上邸

小手島 Oteshima

丸亀港の北 15 kmの海上に浮かぶ塩飽諸島の中で最も小さい島です。豊かな自然環境に囲まれ、漁業が盛んです。

一本の木に紅白の花が入り混じって咲く桃の木が至る所に植えられており、源氏の白、平氏の赤にちなんで源平桃と名付けられ、春には美しい風景が見られます。

また、島のあちこちには島の方々が制作したアートが点在し、まるでアート作品のような島の風景とともに、島を訪れる人達を出迎えてくれています。



▲春に咲く源平桃

▲高台からは塩飽の島々が一望

プロジェクトの様子

入島式



ワークショップ

〈和三盆づくり&試食会〉 場所：本島コミュニティセンター



ワークショップ

〈青木石とシーグラスで作る光のオブジェ制作〉

場所：広島コミュニティセンター



作品発表会

場所：本島コミュニティセンター



場所：広島コミュニティセンター



滞在生活・制作の様子



卒島式

場所：丸亀港



作品発表会「未来の収穫祭 2023」

場所：丸亀市生涯学習センター



本島

Honjima

作品介绍

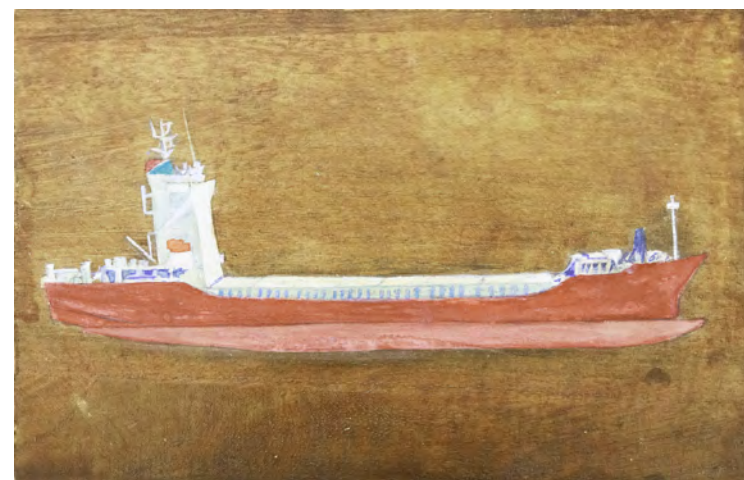


金沢美術工芸大学

佐藤 あい Ai Sato

「島に回帰する」 470×910 土佐麻紙、墨、水干絵具、岩絵具、胡粉 「夏憩」 910×652 土佐麻紙、墨、水干絵具、岩絵具、胡粉





武蔵野美術大学

木村 苑香 Sonoka Kimura

左上：「夏の煌めき」 370×1030 高知麻紙、岩絵具、水干絵具、盛り上り胡粉

左下：「見据える先は」 297×4007 キャンバス、岩絵具、水干絵具 右下：「flotsam」 150×230 板、岩絵具、水干絵具



東北芸術工科大学

澤井 歩 Ayumu Sawai

「みなぎらる」 530×5580 高知麻紙、岩絵具、水干絵具、錫箔、胡粉、墨

広島 Hiroshima



東北芸術工科大学

籠宮 真瑚 Mako Kagomiya

「escaped Fish」 1303×970 高知麻紙、岩絵具、水干絵具、青木石岩絵具



多摩美術大学

安齋 詩寧 Utane Ansai

「くらし」 200×400×15 さぬき広島に漂着した陶器、岩絵具 「一」 2450×1118 雲流和紙、墨、岩絵具、水干絵具、胡粉





女子美術大学

程佳山 Cheng JiaShan

「午後」 530×803 雲肌麻紙、岩絵具、水干絵具

小井 豐 Otেশhima



武蔵野美術大学

周麗娜 Zhou Lina

「食卓」 500×650 和紙、銀箔、岩絵具、顔彩 「登山道」 650×727 和紙、岩絵具、顔彩、糸、青木石岩絵具、北木石岩絵具





金沢美術工芸大学

上月 花織 Kaori Kouzuki

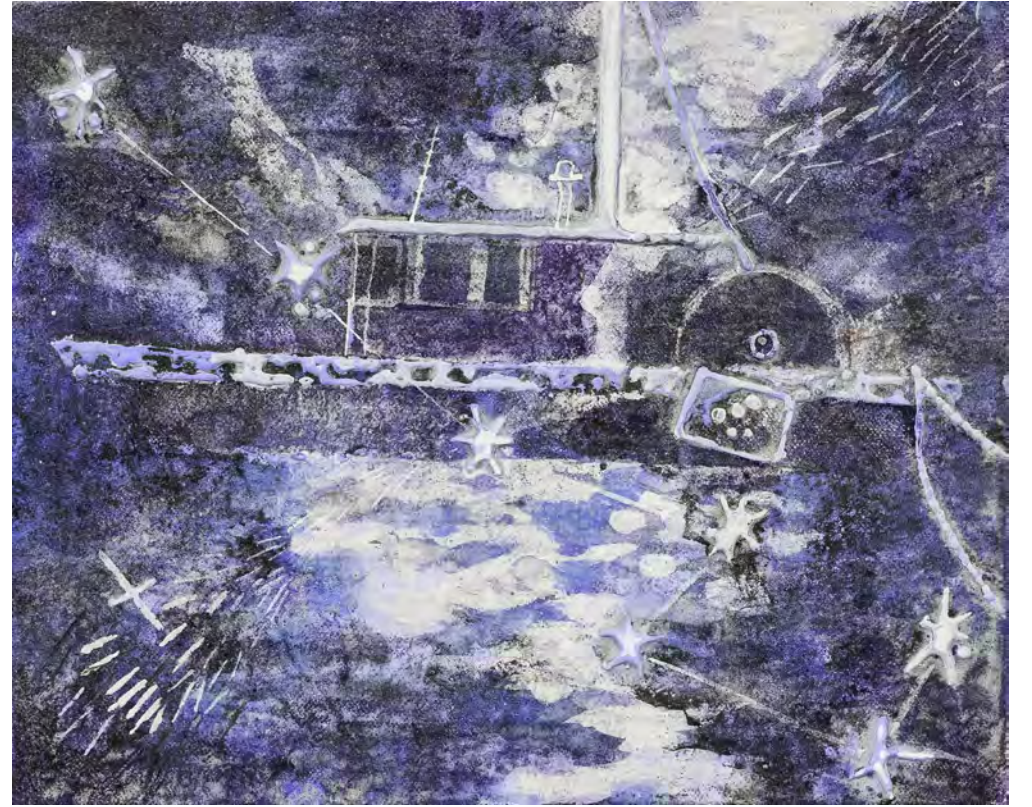
「一熟」 530×410 和紙、水干絵具、岩絵具、墨、色鉛筆 「8月15日、台風の日」 530×727 雲肌麻紙、水干絵具、岩絵具、墨、色鉛筆





女子美術大学
坂部 綾音 Ayane Sakabe

「港」 530×727 雲肌麻紙、水干絵具、岩絵具、青木石岩絵具 「北斗七星」 220×270 麻布、水干絵具、岩絵具、青木石岩絵具





多摩美術大学

南雲 未希 Miki Nankumo

「小手島がら」 800×1000 高知麻紙、岩絵具、水干絵具、水彩色鉛筆

HOTサンダルプロジェクトよせて

卒島生コメント



鳥の鳴き声と船のエンジン音が今の私の目覚ましだ。島に移住をしてから、あたりに耳を澄ませ、目を凝らすようになった。動物や虫、地面の小さな花を探してよく歩く。東京で在学中からよく植物を描いていた私は、わざわざ遠出をしたり何か所も温室を訪ねたりして画題を探した。しかし、今は一歩外に出るだけで愛おしいモチーフに出会うことができ、日々とても充実している。

修了を控えた大学院2年、その頃の私は描きたい絵が全く分からなくなっていた。課題の為に無理矢理絵という形にしてはいたものの、そこには何の気持ちも無かった。焦りと不安を感じる中、参加したのがHOTサンダルプロジェクトだった。瀬戸内の海は時間ごとに姿を変え、木々は別の生き物のようで、台風は私の中のドロドロとした何かを攪拌していった。その波は帰京してからも私の胸を揺らし続けた。

島に移住して8年目。ひとり家で制作をしていると、つい安寧な日々が満足しがちだ。しかし、プロジェクトの学生達、そして時折訪れる卒島生たちが私の意識を広げてくれる。学生だった私を迎えてくれた島の人達も、同じ様に感じていたのだろうか。

今、私はいち島民として彼らが訪れる夏を心待ちにしている。

齊藤 茉莉



HOTサンダルプロジェクトに参加したのは、大学三年生の夏のことです。当時、3~4メートルくらいの大きな絵を描くことに憧れていた私にとって、島の広大な自然の中で製作ができるプロジェクトへの参加はとても良い機会でした。

私が滞在した小手島は、名前の通り小さな島です。港から宿舎までの坂道は、のんびり歩いて15分ほど。そして宿舎からさらに歩いて15分ほど登ると、小手島の頂上に着きます。頂上からは瀬戸内海を一望でき、島々の間を船が行き交う様は絵の中の世界のように美しいものでした。静かに揺れる波間や、道を歩く小さく赤いカニ、遮るもののない広く大きな空…小さな島で出会った全てが宝物のように輝いて見えました。

私はロール紙を大きく広げ、思いつくままに足の裏に絵具をつけて紙の上を歩いてみたり、その上で昼寝をしたりしました。一心不乱に手を動かして描くというよりは、自然と触れ合うようにして制作してみようと思ったのです。出来上がった絵には、これまでに描いたことの無いような大らかさと、不思議な浮遊感があり、私にとって大切な制作になりました。

そして卒業して3年後、縁があって讃岐広島に移住しました。今でも昔と変わらない海と空の美しさを眺めながら、絵を描く生活を送っています。

田嶋 里菜

絵を描く方法は人によって様々ですが、自身の足で歩いてその場の空気や光を感じ、刻々と変化するものの見え方を観察することは、作品を制作するにあたって描き手の感性を高めることに繋がり、表現の幅や物事の捉え方を広げると思います。私自身、現在は島で生活していますが、普段見慣れた景色も季節や時間の変化、人の手が加わることで日々様子が変わり、色々と違った印象に感じるが多々あります。気分の浮き沈みや日々の忙しさなんかでも見える景色は違ってきます。

瀬戸内の島でも、都会であっても、意識を向ければ色々な気付きがあります。好きな場所で生活すること、好きなことを続けるという選択にはそれなりに壁がありますが、後で思い返した時なるべく後悔しないように物事と向き合うようにして、その時の経験が今後の人生の糧になればと思います。

表現したいことを思い通り作品に反映させられないこともあるかと思いますが、このプロジェクトでの経験が、参加者各々にとって今後の作品制作の良い糧になってくれればと思います。

高橋 周平

HOT サンドルフプロジェクト 2023 参加者

本島

- ・佐藤 あい
- ・木村 苑香
- ・澤井 歩

広島

- ・籠宮 真瑚
- ・安齋 詩寧
- ・程 佳山

小手島

- ・周 麗娜
- ・上月 花織
- ・坂部 綾音
- ・南雲 未希



未来の 収穫祭 2023

HOT サンドルフプロジェクト作品展覧会 ～ 未来の収穫祭 2023 ～ 作品図録

制作発行：丸亀市・HOT サンドルフプロジェクト実行委員会

illustration&design：SAAYA MASAKI

撮影：株式会社 夢工房

印刷：有限会社 細谷印刷所

HOT サンドルフプロジェクト HP：<http://www.hot-sandal.com/>





丸亀市・HOT サンドルフプロジェクト実行委員会